川越市立博物館

# 博物館だより

第48号

「月ヶ瀬ノ梅(梅)」 寺尾　日枝神社

## ガラス絵馬

ガラス絵馬とは、ガラス絵の技法によって描かれた絵馬のことで、その形態から通称されています。ガラス絵は板ガラスに油絵具や泥絵具で絵を描き、裏返して鑑賞するもので、ガラスに直接彩色することによって得られる透明感のある鮮やかな色彩が特徴です。ガラス絵馬は、板絵の絵馬と素材と技法が大きく違いますが、奉納の目的は変わらないと考えられます。

ガラス絵は、17世紀以降ヨーロッパで盛んに制作されました。やがてそれが東インド会社などの交易ルートを通じてアジアに伝播(でんぱ)し、各地で素朴な民衆ガラス絵を生み出しました。日本への伝来は、18世紀以降長崎に入港したオランダ船によるものと、中国を経由したものとの二通りがあったようです。やがて長崎や江戸で、風景画や美人画のガラス絵が本格的に描かれるようになりました。その制作に携わったのは、ほとんどが無名の画工達でした。

川越市内に残されているガラス絵馬は、明治20年代から大正期にかけてのもので、画題は「拝み図」と風景画がほとんどです。川越では明治時代に、注文によりガラス絵馬を描いていた人が存在していましたが、その制作や流通の解明は今後の課題となっています。

# 奈良絵本『ちかはる』について

## 1　はじめに

川越藩最後の藩主松平周防守家の家臣だった太田家から川越市立博物館に寄贈された資料に、「ちかはる」と題した奈良絵本が含まれています。表紙は破損したり、欠損したりしていますが、中の状態は良く、絵も鮮明で格調高いものです。この奈良絵本『ちかはる』について紹介を兼ねて考察してみたいと思います。

太田家の家譜（太田家文書）では、初代は太田主膳重記といい、文禄４年(1595)に武州騎西で召し抱えられたとあります。また、明治元年(1868)の「分限帳　上」（光西寺文書）には、「年寄」の項に「高四百弐拾石　太田権兵衛」とあり、幕末には藩の重職を務めていました。

太田家が仕えた松平周防守家は三河譜代の家柄で、永禄７年(1564)に初代康親が戦功によって、徳川家康から松平の姓を許されました。２代康重は家康の関東入封に従い、２万石を拝領して武蔵国騎西城主となりました。関ヶ原の戦い後、慶長６年(1601)には１万石の加増を受けて、３万石で常陸国笠間に入封しました。その後、和泉国岸和田、播磨国山崎、石見国浜田、下総国古河など各地に所領を転じて、13代康英の時に江戸幕府の終焉を川越で迎えました。

家臣の太田家も藩主の国替えに付き従い全国各地を回り、９代目太田元茂が川越で明治維新を迎えています。

## 2　奈良絵本とは

奈良絵本とは、御伽草子や軍記物語などを題材とした、彩色の手書き絵本のことです。奈良絵本という呼び方は、奈良興福寺周辺に住む絵仏師が絵を描いたという説から、明治時代以降に使われるようになりました。奈良絵本は、制作者や制作時期等が表記されていないことから、制作に関することは多くの謎に包まれています。今日の研究では、奈良絵本は室町時代後期から江戸時代中期にかけて制作され、その多くは京都周辺で制作されたと考えられています。初期の奈良絵本は、挿絵と詞書が同じ頁に描かれていますが、次第に詞書と挿絵は独立して描かれるようになりました。これは奈良絵本が、詞書の書き手と挿絵の絵師との分業によって制作され、量産されるようになったことを意味します。

## 3　奈良絵本『ちかはる』

### (1) 制作について

奈良絵本『ちかはる』は上下巻２冊よりなり、紺地金泥草木模様の表紙に「ちかはる」と墨書された朱色の題箋が付いています(ただし下巻は表紙題箋とも欠損)。本文の挿絵と詞書は独立して描かれ、詞書は13行書きの横型本（縦16.5cm、横25cm）で、料紙は間似合紙という厚手の紙を使用しています。

表　紙

挿絵の端裏には「ちかはる二」・「上一」・「下四」等という指図メモが記されています。これは、挿絵と詞書が分業によって別々に作られたことを物語っています。間似合紙は厚手の紙で透けないため、この紙を使用した奈良絵本の多くは、料紙の天地に本文を書く目安となる針穴(針点)の印を付けて量産していたと言われています。しかし『ちかはる』には針点が付けられていませんから、おそらくそれほど量産されたものではないと考えられます。

上記のような形態と、挿絵の金泥を用いた雲の描き方等の特徴から考えて、この奈良絵本『ちかはる』は寛永期頃の制作ではないかと思われます。

### (2) 内容について

奈良絵本『ちかはる』は、鎌倉時代成立の軍記物語『保元物語』を題材として、崇徳上皇側に馳せ参じた武将宇野親治のエピソードを描いたものです。

『保元物語』に描かれた保元の乱は、保元元年(1156)に起こった京都の争乱で、皇室では崇徳上皇と後白河天皇、摂関家では藤原頼長と藤原忠通との対立が激化して起こった争いです。崇徳上皇・藤原頼長側には源為義（源義朝の父)、平忠正（平清盛の叔父）らの武士が、後白河天皇・藤原忠通側には源義朝と平清盛などの武士が参陣しました。保元元年７月11日、天皇側が上皇側を急襲したため、乱は半日で後白河天皇側の勝利となりました。敗れた崇徳上皇は讃岐に配流され、為義、忠正らは斬首されました。これ以後、次第に武士の力が強まりました。保元の乱は、武家政権成立の契機となった事件です。

『ちかはる』は、①後白河天皇の即位、②鳥羽院の熊野参詣と熊野権現御託宣、③鳥羽院の崩御、④崇徳院の謀反、⑤官軍の派遣、⑥親治生け捕り、という構成になっています。以下に①から⑥のあらすじを略記してみます。

①後白河天皇の即位

嘉承2年(1107)7月9日堀河天皇の崩御により、鳥羽天皇が5歳で即位する。鳥羽天皇は在位16年、21歳の保安4年(1123)1月に位を退いて崇徳天皇が即位する。保延5年(1139)5月に鳥羽院と美福門院得子の間に近衛天皇が誕生したため、永治元年(1141)12月崇徳天皇は無理に退位させられて、近衛天皇が3歳で即位する。しかし、近衛天皇は久寿2年(1155)17歳で病死してしまう。崇徳上皇は、自分は復位しなくても今度こそ皇子の重仁親王が即位するだろうと待ち受けていたが、意外にも美福門院の計略により、崇徳上皇と同腹（待賢門院璋子）の弟である後白河天皇が即位してしまう。美福門院は近衛天皇が夭折したのは、崇徳上皇親子の呪詛によるものと思い、後白河天皇を推挙したのである。こうした背景があって物語は始まる。

＊歴代天皇略表

72白河－73堀河－74鳥羽┬75崇徳－重仁親王
　　├77後白河－78二条
　　└76近衛

②鳥羽院の熊野参詣と熊野権現御託宣

鳥羽院の熊野参詣は、公卿や殿上人などが華やかな出で立ちで付き従い、その行幸の様子を京中の貴賤の人々が見物しようと、千里の浜まで行列が続く様を描いている。熊野本宮では夜通し鳥羽院が祈っていると、本殿の御簾の裾から左手と思われる美しい手が出て、手を裏返したり、引っ込めたりを繰り返す。

夢でもなく現実でもないような、不思議な体験をした鳥羽院は、巫女を呼んで占わせた。すると、「明年の秋頃必ず崩御する。その後世間が手のひらを返すようになる」という熊野権現の御託宣があった。列座の公卿や殿上人は、「どうにかして鳥羽院の寿命を延ばしてほしい」と口々に申したところ、「熊野権現は日本の国の鎮守として、衆生に御利益を与えるが、神力にも限りがある。熊野三山全部の仏法守護の力をもってしても院を助けることはかなわない。したがって、浮世に御心を留めず極楽浄土を願い、御祈念のお勤めをすることである」というお告げを残し、神霊は巫女の体から離れた。

③鳥羽院の崩御

翌保元元年(1156)の夏頃から鳥羽院の具合が思わしくない。后の宮や公卿たちは嘆き合って、寺々での祈禱等を尽くすが効き目がない。ついに熊野権現の御託宣の通り、7月2日に鳥羽院は54歳で崩御した。人間は傷つきやすくはかない芭蕉葉の露のようなものであるから、死は驚くべきことではないけれども、万人は憂いに沈んだ。また美福門院のお嘆きはことさら深かった。

④崇徳院の謀反

鳥羽院崩御後様々な動きがあり、崇徳上皇の謀反も囁かれた。後白河天皇方は源義朝に命じて藤原頼長方の留守番役を搦め捕らせた。京中は軍兵が東西南北から兵具を隠し持って集まってきた。近衛天皇崩御後、崇徳上皇の皇子重仁親王が天皇に即位するものと思っていたところ、崇徳上皇の弟の後白河天皇に位を奪われてしまい、後白河天皇と崇徳上皇の関係は悪化していた。また一方摂関家では、藤原忠実の二男頼長が、嫡男である関白忠通を差し置いて氏長者になったことから兄弟の仲が悪く、左大臣頼長は院方に、関白忠通は天皇方に分かれる。また天皇方の総大将には源義朝、平清盛、院方の総大将は義朝の父為義、清盛の叔父忠正で、父子、兄弟、叔父甥が思い思いに引き分かれて戦うことになる。京中の家々は門戸を閉じ、資財や細々な道具を運び隠す。鳥羽院崩御後、七日の事である。

＊藤原摂関家略系図

藤原忠実(富家禅定殿下)┬忠通(関白)
　　└頼長(左大臣)

＊清和源氏略系図

頼義┬義家－義親－為義－義朝
　　└義綱

＊平氏略系図

平正盛┬忠盛－清盛－重盛
　　└忠正

次の⑤と⑥は『ちかはる』のクライマックスの場面です。また、この奈良絵本の主題となる段落でもありますから、なるべく原文にそって口語訳を記すことにします。

鳥羽院の熊野参詣

⑤官軍の派遣

京には兵どもが道も避けることができないくらいに集まってきて騒ぐから、少納言入道信西(藤原通憲)に騒動鎮定のため京への入り口、すべての関を封鎖するように宣旨が下った。信西は検非違使等を召集して関々を警固させる。宇治路を平基盛（清盛二男）、淀路を源季実、粟田口を宗判官資行等が固めた。余勢を率いて馳せ参じた検非違使の中に基盛は宇治橋守護のため大和路を南下して、法性寺の一の橋辺りで、大和国の方からやって来たと思われる甲冑に身を固めた兵士三十四騎にばったり行きあった。基盛は三百余騎をずらりと並べて真ん中に控えている。青の狩衣に黒糸威の鎧を着て、黒い馬に黒鞍を着けて乗っている。基盛は弓を取り直しながら立ちあがって、「これは何れの国より何方へ参ずる人か。近日謀反の噂があって軍兵数知らず入洛して、京中の騒動はひととおりではないから、宣旨により宇治橋守護のため参上した者だ。桓武天皇十二代の後胤、平将軍将門に八代の末、刑部卿忠盛の孫、安芸守清盛の二男、安芸判官基盛とは我のことだ。子細を承ってお通し申そう」と言ったので、大将と思われる大男で面魂が荒々しく、濃い藍色の直垂に緋威の鎧を着て黒羽の矢を負い、節巻の弓の握りが太いのを持って、たてがみだけが黒色で他は黄色の太くて逞しい馬に、銀で縁取りをした鞍を付けて乗った者が、弓を取り直して立ち上がり「御家名と御先祖の系図を承った。参上する我を何者とお思いあそばすか。清和天皇十代の後胤、六孫王の末葉、摂津守頼光の弟、大和守頼親に五代、中務丞頼治の孫、下野守親弘の嫡子、大和の住人、宇野七郎親治と申す者でござる」と高らかに名乗った。基盛が「御家名は承った。宣旨によって御上洛か、院宣に従って参上するのか、承りたい」と尋ねたが、その時親治はどのように思ったのか、矢負いをきちんと並べ冑の緒を締め、鎧の左袖を頭の上にゆすぶり上げて、しころ（冑の左右及び後に垂れて首筋を覆うもの）を傾けて、天皇方にむけて上洛するわけを答えてここを無事に通るか、またはっきりと院方へ参上する理由を言って討ち死にするか、どのように答えようかと思い悩んだが、弓矢を取る者にとって少しでも偽ることは、後代の武勇の名に傷が付くと思い、「上意を受けた左大臣からのお召しによって、院方へ参上する」と、思いきった様子で高らかに述べた。基盛は敵と聞いたからには冑の緒をしめ馬の足を立て直し、「それではひとりもお通し申すわけにはいきますまい。早く帰りなさい。ああ、しかたのないことだな、一天下の主君の宣旨には当然従うべきだが、位を退いた天皇の院宣に応じるべきであろうか。天皇の治める国土に住みながら、どうして朝敵になられるのか、早く何事もないような振りをして、内裏へ参上なさるか、基盛と一緒に宇治橋を守護なさるか、どちらか承ろう」と言うと、親治は強い武将であるからあざ笑って、「基盛の言葉とも思われないことだ。弓矢を取る男は一度言った言葉を変えたりはしない。院宣に付き従って院へ参る親治が、宣旨だからといって今更違えるようなことはあろうか。源氏の家に生まれたからには二つの心はないものだ、そちらの教訓には、まったく従うわけにはいかない。高祖父大和守頼親からいまだ軍のかけひきについての評判をけがさない。我こそはと思う者は親治をしとめよ」と言って、三十四騎がしころを傾けて、馬の轡を並べ喚声をあげて駆けて行く。基盛の家来が、たちどころに二十七騎討たれた。親治の家来も眼前で八騎討たれ、負傷者は両者数えられないほどであった。

⑥親治生け捕り

基盛も危なかったが、法性寺の一の橋に勅命に叛く者がいると都へ伝わって、内裏から速やかにこの者を搦め捕るようにと、優れた兵を一千余騎差し向けられた。基盛が高い所に飛び上がって敵の様子を見れば僅かの小勢で、味方は大勢である。首を取っては無念である。生け捕りにしようと思って、大声で「ものども組み捕れ」と命令を下す。伊賀・伊勢の伊東・斎藤を始め、兵士は我劣るまいと馳せ参じる。一騎が組めば、その上に七、八騎十騎落ち重なって、刀も抜かせず、まして腹も切らせない。親治は気丈に思っても、大勢に囲まれてはかなうべきもない。皇室に関する事にはもろいことはないからであろうか、十二人が生け捕りにされたことは無惨である。基盛はよい敵を搦め捕ったと勢いこんで、夜になって帰っていく様子は勇気凛々としているように見えた。

貴賤の人々は親治を「あっぱれで崇高な侍だな、一騎当千とはこのような事を言うのだな、大方の者なら当座の難を逃れるため、軍事上の策略を施すのに、さすがに

親治、一の橋辺りで基盛と出会う

血気盛んの侍ほど心のけなげなことはない」と褒めたという。また「基盛もよき兵を搦め捕った」と言って褒めた。またある者は「後陣が続かないようなら基盛も討たれてしまったが、後陣がよいから勝った」と言うと、「もっともだ」と言って皆涙で濡れた袖を絞った。

さて親治等十二人の兵どもは、左右の役所に引き渡されて役人に子細を尋問された後、牢屋に入れられてしまった。天皇は御感動なさり、夜に臨時の官職任命の儀式（除目）が執り行われ、基盛は正五位下に叙せられた。除目の理由が書かれた功績書には、「親治以下の朝敵追討の賞なり」と書かれていた。その当座においてはこの上ない誉れであると思われた。内裏では騒乱を鎮圧したと評判の基盛は、館に帰って侍どもを召し集めて喜んだが、大騒ぎするほどでもなかった。

## 4　終わりに

上記のように、この奈良絵本『ちかはる』は、天皇方の命を受けて宇治橋警固のため、大和路を南下する平基盛軍と、崇徳上皇方に馳せ参じようと上洛する宇野親治の軍が、法性寺の一の橋辺りでばったり出会う場面がクライマックスで、本文の描写も詳しくなされています。「内裏（天皇方）に向けて上洛する」と言って、この場を無事に通り抜けようかという思いも親治の頭をよぎります。また、はっきりと「院方へ馳せ参じる」と言って、討ち死にするかどうか思い悩んだ末、偽ることは後代の恥と、武士としての自尊心が増幅してきて弱い気持ちは抑えられます。この場面の心理描写は血気盛んな武将の心の内面が表現されていて興味深いところです。

また相手の基盛も「位を退いた天皇（崇徳上皇）に従うべきではない、何事もないような振りをして天皇方の内裏に参るか、基盛と共に宇治橋の警固をなされ」と、説得する場面があります。猛猛しい武将が無血の方法で事を穏便におさめようとする人間基盛も描かれています。

武士にとって、生け捕りにされることはこの上ない屈辱なことに違いありませんが、大勢の敵に取り押さえられて親治は刀を抜いて切腹することもできませんでした。しかし、人々は親治をけなげに一騎当千の崇高な武士として褒めたたえています。

絵本の最後の頁に、「実母春応寿貞信女為形見予授与之秘蔵して持来候／松斎子正信／于時正徳二歳次壬辰八月二十五吉辰日／お蔵殿」という書き込みがあります。文面からこの奈良絵本は、正信が母親の形見として授けられて秘蔵してきたが、正徳２年(1712)にお蔵に授けたという事情がわかります。おそらく正信の母が嫁入り本としてこの奈良絵本を持ってきたものだろうと思います。大名や公家などの姫君が嫁入り道具として彩色の絵入り本や美麗な写本等を蒔絵の箱等に納め持って嫁ぐ風習がありました（財力のある商人の娘や、名主などの娘の嫁入りにも使われました)。正信もお蔵もどういう人物かは不明ですが、お蔵はこの奈良絵本を持って太田家に嫁いできた女性ではないでしょうか。

お蔵がこの奈良絵本を譲り受けてから三百年近くもたっていることは驚きでもあります。また親治の武士魂が周防守家重臣の太田家に脈々と受け継がれている思いがします。この度、奈良絵本『ちかはる』を宝箱をあけるような思いで、胸をときめかしながら読ませて頂きました。太田家が家伝の品々を何百年も大切に伝来されてこられたことに深く敬意を表し、この絵本に巡り合わせて頂いたことを感謝したいと思います。

（古文書整理員　林　寿子）

＊参考文献
・『保元物語　平治物語』（日本古典文学大系31）岩波書店　昭和36年刊
・『保元物語評釈』明治書院　大正７年刊
・『保元物語　平治物語』（日本の文学　古典編28）ほるぷ出版　昭和61年刊
・『奈良絵本・絵巻の世界　カラー版』石川透編　慶応義塾大学ＯＲＣ(奈良絵本)　平成17年刊
・『お伽草子事典』徳田和夫編　東京堂出版　平成14年刊
・『奈良絵本 上・下』工藤早弓著　京都書院　平成10年刊
・『日本系譜綜覧』日置昌一著　講談社　平成８年刊

親治、生け捕られる

# マコモ馬（七夕馬）について

マコモ馬は七夕馬の一種で、マコモ（真菰）を編んで馬の形にしたものです。

七夕に飾ることから、マコモ馬は織女（しょくじょ）と牽牛（けんぎゅう）が逢うときの乗り物であるという話や、幸福を運んでくるなどの言い伝えがあります。

これとは別に、東日本ではお盆の１週間くらい前、旧暦の７月７日に祖先の霊を迎えるための乗り物として、草で馬や牛を作っていました。このことから、お盆の行事とも関係があると考えられます。

マコモ馬の製作風景

『川越市の年中行事（Ⅰ）・（Ⅱ）』（平成11年、13年　川越市教育委員会刊）によると、川越でも昭和30年頃まで下小坂、山田、石田本郷、古谷上、渋井、南田島などの地域でマコモ馬を庭や軒下に飾る風習が見られました。

役目を終えたマコモ馬は、７日の夕方または８日に川へ流したり、魔よけのため屋根に投げ上げたりしたそうです。残念ながら、今ではマコモ馬を飾ることもほとんどなくなり、また作ることのできる人も少なくなってしまいました。

８月５日、博物館の「夏休み子ども体験」で、このマコモ馬の製作を行います。年に一度だけ、めぐり逢うことができる織女と牽牛に思いをはせながら、マコモ馬を作ってみたいと思います。

マコモ馬は竹や棒を渡して、雌雄を向かい合わせて庭などに飾ります。

渋井では観音堂に飾りました。

市内にあるマコモの自生地です。マコモはイネ科の多年草で川などに自生しています。川越でも見られるところが少なくなりました。

## 利用状況

●平成17年度●　博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館

博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも、平成17年度中に、多くの皆様に御来館いただき、誠にありがとうございました。今後も、より多くの方に御満足いただけるよう、常設展示・企画展示の充実を図っていきたいと考えています。

皆様の御来館を心よりお待ちしています。

| 施設区分 | 年間入館者数 | | | | 1日平均入館者数 | 開館日数 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 一般 | 大学生高校生 | 中学生以下 | 合計 | | |
| 博物館 | 62,537 | 2,835 | 32,599 | 97,971 | 337 | 291 |
| 川越城本丸御殿 | 73,578 | 2,513 | 24,359 | 100,450 | 336 | 299 |
| 川越市蔵造り資料館 | 50,467 | 2,971 | 24,609 | 78,047 | 258 | 302 |

# Information

平成18年度の博物館行事です。（12月まで）

## 講　座・教　室　etc.

＜一般向け事業＞

| 開催日 | 9／10(日)・23(土)、10／6(金) | 9／17(日) | 10月頃 |
|---|---|---|---|
| 講座名<br>内　容<br>申込み開始日 | ★博物館歴史講座<br>川越の中世Ⅱ<br>—南北朝・室町時代—<br>9／3(日) | ●野外博物館教室<br>まちなかの美を歩く<br>—寺社建築の彫刻—<br>9／2(土) | ■講演会<br>柳沢吉保(仮題)<br>未　定 |
| 10／14(土) | 11／3(文化の日) | 11／25(土)・26(日)、12／2(土)・3(日)・9(土)・10(日) | |
| ●野外博物館教室<br>川越まつり<br>—山車曳き体験—<br>10／2(月) | ◆民俗芸能実演<br>市指定・無形民俗文化財<br>「中福の神楽」<br>申込み不要 | ◆機織り体験<br>未　定 | |

※変更の可能性もあります。申し込み方法も含め、詳細については「広報川越」を御覧ください。
お問い合わせは博物館まで。

＜子ども向け事業＞

「◇夏休み子ども体験」と「☆土曜体験教室」は、午前10時～11時30分と午後1時30分～3時30分の時間帯で行います。ただし、9／9の土曜体験教室は午後３時～５時の時間帯で行います。

| 開催日 | 7／22(土) | 7／29(土)・30(日) | 8／5(土) |
|---|---|---|---|
| 講座名<br>内　容<br>申込み開始日 | ◇夏休み子ども体験<br>ミニ縄文土器作り<br>当日先着 | □昔の遊び<br>なつかしい昔の遊び<br>申込み不要 | ◇夏休み子ども体験<br>マコモ馬作り<br>7／3(月) |
| 8／19(土) | 8／26(土) | 9／9(土) | 9／23(土) |
| ◇夏休み子ども体験<br>和楽器体験<br>当日先着 | ◇夏休み子ども体験<br>アンギン体験<br>当日先着 | ☆土曜体験教室<br>十五夜の話とお月見だんご作り<br>9／1(金) | ☆土曜体験教室<br>和紙作りに挑戦<br>9／4(月) |
| 10／7(土) | 10／28(土) | 11／4(土) | 11／11(土) |
| ☆土曜体験教室<br>ミニホバークラフトを作ろう<br>10／1(日) | ☆土曜体験教室<br>カレイドスコープ(万華鏡)を作ろう<br>10／4(水) | ○子ども博物館教室<br>よろいの秘密<br>10／3(火) | ☆土曜体験教室<br>切絵・折紙を楽しもう<br>当日先着 |
| | 11／18(土) | 12／16(土) | 12／23(土) |
| | ☆土曜体験教室<br>とびだす川越の建物<br>11／1(水) | ☆土曜体験教室<br>お正月飾りを作ろう<br>12／1(金) | ☆土曜体験教室<br>たこを作ろう<br>12／2(土) |

※変更の可能性もあります。申し込み方法も含め、詳細については「広報川越」を御覧ください。
お問い合わせは博物館まで。

## 新コンテンツ登場!!

### ～博物館ホームページをリニューアルしました～

このたび、博物館のホームページを全面的にリニューアルいたしました。

＜主な新コンテンツ＞

・資料検索システム（博物館所蔵資料のうち約7,000件を画面上で見ることができます。）

・プレイバック展覧会（以前行われた展覧会の内容を画面上で見ることができます。）

また、アドレスも変わりました。

**博物館新アドレス：　http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/**

今後は新しい情報を随時発信していきますので、よろしくお願いいたします。

# 第16回収蔵品展

## 甲冑（かっちゅう）—川越市立博物館収蔵の武具を中心に—

### 平成18年7月22日（土）～9月10日（日）

伊予札紺糸素掛威胴丸具足
（二代松平康重所用）

博物館には、市民をはじめ多くのみなさまにより御寄贈・御寄託いただいた資料が、数多く収蔵されています。こうした貴重な資料を多くの方々に御覧いただくため、毎年収蔵品展を開催しています。

本年度はこうした資料の中から、甲冑を中心に展示いたします。甲冑は、戦いの中で自らの身を守る防具として誕生しました。そして、戦国時代には打ち続く戦乱の中で洗練され、機能的な美しさをもつようになりました。江戸時代になると実戦を離れて武門の象徴となり、装飾性が重要視された美術工芸品的な甲冑が作られるようになりました。展示する資料は、江戸時代末期に川越藩主を務めた松平周防守家ゆかりの甲冑・馬具類です。これらは藩主を含めて、さまざまな家に伝来した品々ですが、当時の姿を今日に伝えてくれる貴重な資料です。また今回は、こうした当館収蔵の資料の他に、松平周防守家の菩提寺である光西寺の御出品協力を賜りました。この収蔵品展を通して、川越藩ゆかりの甲冑類を御覧いただければ幸いです。

桶側二枚胴具足
（小久江家伝来）

## 第28回企画展 「柳沢吉保と風雅の世界」

会期：平成18年10月7日（土）～11月12日（日）

元禄７年（1694）に川越藩主となった柳沢吉保は、５代将軍徳川綱吉の側用人として重用され、幕政に大きな力をもちました。また、吉保は藩政にも意を注ぎ、三富新田の開拓などの業績を残しています。この企画展では、柳沢吉保を藩政と学問・教養の面から取り上げてみる予定です。

## 利用の御案内

◆入館料

| 区分 | 博物館 | 川越城本丸御殿 | 川越市蔵造り資料館 | 共通入館（観覧）券 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | ●博物館<br>●美術館 | ●博物館<br>●本丸御殿<br>●蔵造り資料館 | ●博物館<br>●本丸御殿<br>●蔵造り資料館<br>●美術館 | ●博物館<br>●本丸御殿<br>●蔵造り資料館<br>●美術館<br>●まつり会館 |
| 一般 | 200円（160円） | 100円（80円） | 100円（80円） | 300円 | 300円 | 450円 | 800円 |
| 大学生<br>高校生 | 100円（80円） | 50円（40円） | 50円（40円） | 150円 | 150円 | 220円 | 600円 |

※（　）内料金は、団体〔20名以上、１名につき〕の場合

◆開館時間　午前９時から午後５時まで（ただし入館は４時30分まで）

◆休館日　月曜日（休日の場合は翌日の火曜日）※川越まつりの翌日は開館
第４金曜日（休日を除く）年末年始（12月28日～１月４日）
特別整理期間（12月中旬予定）

＊開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも同様
（特別整理期間は、博物館のみ休館、蔵造り資料館は１月２日から開館）

### 交通案内

東武東上線・JR川越線　川越駅より
または西武新宿線　本川越駅より
東武バス「札の辻」下車徒歩８分
・御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。

発行日　平成18年７月26日　　発行　川越市立博物館
〒350-0053 川越市郭町２丁目30番地１　☎049-222-5399　FAX 049-222-5396
Eメール　hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp
ホームページ http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/